

成樹久美子

* 登場人物

俊之（30） 札幌市電の運転手
拓也（5） 男の子
老人（70） 拓也の祖父
上司（40） 俊之の上司

* あらすじ

俊之は札幌市の市電の運転手。幼い頃から札幌で育ち、市電の除雪車「ササラ電車」が大好きで、市電のハンドルを握った。数年が経ち、仕事にも慣れた。ササラ電車での除雪もお手のものだ。だが、その分、市内を一周するだけの仕事を単調に感じるようになっていた。

その冬は例年がない大雪だった。ササラ電車の出勤回数も多く、始発電車が動き出す前の除雪に何度も呼び出されていた。

その日も朝の四時に出勤の電話が来た。いやいや出勤し、ササラ電車を走らせる俊之。と、日も昇っていない市電の線路沿いに小

さな子供と老人が立っていた。
突然、老人が電車の前に飛び出してきた。ササラ電車に乗せて欲しいという。俊之が規則で乗せられないことを説明するが、老人は懇願する。

俊之は老人の懇願に負けて、規則違反を承知で二人をササラ電車に乗せた。

座席のない、冷え切ったササラ電車の中で、目を輝かせて、窓からの景色を見る子供。その子供をいとおしそうに見守る老人。子供が満面の笑みで言った。

「僕、しゅるしゅるさんの運転手になる」
その言葉に俊之ははっとなる。

自分も冬になると、雪にも関わらず、このササラ電車を見に、外へ飛び出したこと、ササラ電車に乗りたくて、電車の運転手になったこと……。

俊之が子供の名前を訊こうと振り返ると、ササラ電車には子供の姿も老人の姿もない。俊之が見たのは、俊之自身の子供の頃の純粋な思いだったのだ。

俊之の仕事に対する気持ちだが、また前向きに戻った。

翌朝も大雪だった。けれど、俊之を起こす携帯電話の着信音は楽しげな音楽になっていた。

S E 携帯電話の着信音。
(曲：雪の降る町を)

俊之「(寝ぼけ声) またササラ出させてか。
何時だと思ってるんだよ。ああ？ 四
時？」

S E 携帯電話に出る音。

俊之「(だるそうに) はい……」
上司の声「おー俊之、悪いな、こんな時間
に」

俊之「あ、お疲れ様です」

上司の声「すまんが出勤してくれ」

俊之「また俺の待機の日曜日ですよ」

上司の声「仕方ないべ、こればかりは。北

海道なんでもんさ、冬は雪降るもんだ」

俊之「はいはいわかりました」

S E ドアの開く音。

俊之「おはようございます」
上司「はい、おはようさん。頼むよ、始発ま
でになんとかしてくれな」

俊之「(面倒そうに) はい」

S E ナイロンのすれる音。
ファスナーを上げる音。

上司「寒いからしっかりまかなってな」

俊之「はいはい」

S E ササラ電車のササラが回る音。

俊之「だいたいいつぺんに降りすぎなんだよ、
降ったら融けて、融けたら降りやいいの
に」

俊之M「俺は札幌の市電の運転手だ。冬にな
ったら線路を除雪するためのササラ電車
も運転する。黄色と黒の縞模様の電車の
前後に、竹のササラがついていて、それ
が回って雪を掃き飛ばす。その姿は実
にカッコイイ」

俊之「じゃあ、行くとしますか」

S E ササラ電車が走り出す音。

俊之「まったくいやだねえ、札幌は雪ばっか
り多くてさ。考えたら一年の三分の一は
雪に埋まってんだよな。そして俺は、サ
サラに乗ってばかり……と、人、人、
危ないよーん」

S E 電車の警笛。

俊之「……って、おいおい、こんな真っ暗な
冬の四時に年寄りと小さな子供かよ」

S E 電車の警笛。

俊之「ちよっと、危ないから避けてよ、つ
て！」

S E ササラの回転音、停止。

S E 列車の停まる音。

S E ドアが開き、吹雪の音。

俊之「危ないですよ！ 飛び出さないでくだ
さい！」

老人「すいません、この子に乗せてやってく
れませんか？」

俊之「ええつ、ダメですよ。一般の人は乗せ
られないことになってるんですから」

老人「そこを何とかお願いします」

拓也「じいちゃん、乗りたーい！」

俊之「ぼく、これはお仕事の車だから乗れな
いんだよ」

拓也「やだあ、乗りたーい！」

俊之「座席もないし、ケガされちゃ困るん
で」

老人「そこをなんとか！ 昼間はダメだと思
ってこんな夜中に出てきたんです」

拓也「乗りたーい！」

俊之「参ったなあ……じゃあ僕に乗せてもら
ったって、絶対言わないでくださいよ」

老人「いいんですか？ 本当にありがとうございます
ございます！ 良かったねえ」

SE 足音がステップを上る音。

俊之「ほら、ぼく、危ないから気をつけて」

SE ササラ回転音。

俊之「じゃあ、動きますから、つかまってる
ください」

SE 電車の動く音。

拓也「うわー！ すごーい！」

俊之M「規則違反だっってわかってたけど、
俺は二人を乗せてしまった。まだ暗いし、
誰も見ていないだろうと思って」

老人「本当にありがとうございます。この子
がどうしても乗りたがって」

俊之「冬しか見られませんかからねえ、しかも
雪が少なかつたら出勤回数も少ないし」

老人「今年はまだ三回目ですね」

俊之「よく知ってますね」

老人「孫と数えて、暦に付けてるんですよ」

俊之「先々週の金曜日と先週の土曜日と」
老人「そして今日か……か」
俊之「まったく、当たりが良いって言うのか、

貧乏くじって言うのか」

老人「いやいや、あなたで良かった」

俊之「そうですねえ、俺、どうも要領が悪
いような気がして」

老人「吹雪はあなたのせいじゃないでしょ。
それにあなたじゃなきゃ、ササラに乗せ
てもらわなくて出来なかった」

俊之「へへっ。お願いですから、ぜーったい
内緒ですよ」

俊之M「秘密を共有したことで、吹雪の中、
出会った二人ともものすごく親しくなった
気がした」

老人「近所に小さい子供もいなくて、もっぱ
ら私が孫の遊び相手で」

俊之「大変でしょう」

老人「最近のロボット物とか、マンガ物には
ついて行けません。でも、この電車なら、
私も子供の頃からよく知っている」

俊之「俺も大好きなんですよ。この市電が」

老人「何故か、孫はこのササラ電車が大好き
ですね」

SE 列車の警笛。

俊之「子供って、変わった乗り物が好きです
よね、ブルドーザーとか、コンクリート
ミキサーとか」

老人「この子もそうなんですよ、働く車のミ
ニカーばかり集めてて」

俊之「働く車かあ、俺も集めてたなあ。大人
にとっては仕事なんですけどね」

老人「大変でしょう、このササラも」

俊之「大変ですよ、昼間はまだいいけど、夜
や、特に始発前なんか、寒いし、視界も
悪いし」

老人「すいません、飛び出したりして」

俊之「いや、いいんですよ。ちよつとビク
リしましたけどね。それはそうと、こん
な夜中に子供さん連れ出して、家族の方、
心配しませんか？」

老人「大丈夫ですよ」

俊之「ならいいんですけど」

俊之M「どう見ても小学校には上がっていな
い子供と老人だった。老人が早起きな
は良いとして、子供がこんな夜中に起き
てて良いものだろうか？」

老人「何せ、初孫でして。じいちゃんと呼
ばれるのはいやだったけど、呼ばれてみる
と、これでなかなか。何でも言うことを
きいてしまつて。甘いばかりのじい
ちゃんです」

俊之M「うーん、どっちがどっちにつきあつ
てるんだらう。もしかして、子供が老人
に付き合わされているんだらうか？ ま
さか、誘拐……なんてこと、ないよな」

俊之「ぼく、お母さんは？」

拓也「お家で寝てる」

俊之「お父さんは？」

拓也「お家で寝てる」

俊之M「結局、なにもわからなかった。ただ、窓の外を見る子供の目がキラキラと輝いていた。その子供を見つめる老人も、穏やかな表情だった。電車を好きな人に悪い人はいない。そう思いたかったのもある」

俊之「あ、四丁目の停留所です。ちょっと揺れますから、つかまっててください。ぼく、つかまってるね」

拓也「うん！」

SE 電車がポイントを通過する音。

拓也・老人「おおーっ！」

俊之「大丈夫ですか？」

拓也「すごいね！　すごいね、じいちゃん！」

老人「いやあ、ありがとうございます。こんなに喜ぶとは思ってもみなかった」

俊之「俺も電車、ものすごく好きだったんですよ。ちょうど、さっき、二人を乗せた辺りに生まれた家があったんです」

老人「そうですか」

俊之「今は建て換えされてなくなりました」

老人「札幌は常に変わり続けてますからね」

俊之M「札幌の市電は、毎年のように存続か廃止かと騒がれていた。しかし、最近、存続に向けての環境整備が始まり、市電が走る道路の拡幅工事が決定され、対象になった建物は取り壊されたり、建て直しが始まっている」

老人「昔、市電は、本当に市電だった。札幌の街中を走っていたんです」

俊之「父から聞いたことがあります。でもあまり覚えてないなあ」

老人「ススキノはずっと真っ直ぐ行って、川を渡り、豊平まで、北は円山や、札幌駅の北側まで走っていたんですよ」

俊之「まるでサンフランシスコみたいだ」

老人「そう、でも、雪が降る北国には、線路の上だけじゃなく、どこまでも行ける車のほうが便利だった」

俊之「あ！　おじいさん！　ぼく！　しゃがんで！」

SE 電車の警笛の音。

俊之「すいません、向こうから先輩の運転するササラ電車が来たモンですから」

老人「いやいや。こちらこそ、わがままを言っただけです。今、

いたずら盛りだった少年時代に戻ったよ。うでしたよ。わっはっは」

俊之「ぼく、寒くないかい？」

拓也「うんっ！」

俊之M「そう言っただけの子供のほっぺたの赤さが妙に印象的だった。今時の子供には珍しいくらい、赤みを帯びていた。まるで昔の子供のようだった」

俊之「この電車通日も変わりましたね」

老人「こんなにマンションばかりではなかったですよ」

俊之「小さな商店がたくさんありましたよね。駄菓子屋もあったような気がする」

老人「みんな、私らの友達の家だった。若い人たちが札幌に集まってくるのも悪くはないけど、風情がなくなるのはねえ」

俊之「こんなにたくさん人が住んでいるのに、電車に乗ってくれる人は減ってるんです」

老人「車は便利ですからね」

俊之「本当はもっと電車に乗って欲しいんです。電車の良さをわかって欲しい……。ていうのは父の受け売りですけど」

老人「お父さんは？」

俊之「……亡くなりました。俺が電車の運転手の採用試験の合格通知を受け取る前の日前の日でした」

老人「そう……ですか、いや、申し訳ないこ

とを訊いた」

俊之「いえ。……もう。八年か」

老人「お若い頃だったんですね」

俊之「ええ。実は父もこの市電の運転手だったんです」

老人「ほう、そりやすごい」

俊之「嬉しかったです。合格通知が来た時は、父の葬式の日だって言うのに、『やった！』って、叫んで母に怒られました」

老人「あつはつは」

俊之「あの頃は毎日、電車のハンドルを握るのが楽しくて」

老人「今だって楽しいんでしょう？」

俊之「はあ……」

老人「楽しくないですか？」

俊之「実際に仕事になると大変です。始発からの出勤だったり、最終までの勤務だったりすると、普通にサラリーマンしたかっただけか欲が出来ます」

老人「慣れるとそんなモンでしょう」

俊之「慣れって怖いですね。毎日同じ所を走っていると、退屈になってくる」

老人「事故とか大丈夫なんですか？」

俊之「それはもちろん、大丈夫です」

老人「でも、退屈なんですか？」

俊之「はい」

老人「それは運転手さんに限ったことじゃない。私だって、去年、定年するまで、ずっと会社のビルの中で、机とにらめっこして、四十年過ごしたんだ」

俊之「四十年……ですか」

老人「そうです。それに比べたら、運転手さんは幸せだ。窓の外の景色がどんどん変わる」

俊之「でも、毎日同じです」

拓也「あ、パン屋さんがない！」

俊之「え？ あ……ホントだ、角のパン屋がなくなってる」

俊之M「そこにあつたはずのパン屋は俺の同級生の実家だった。同級生の父親がパン職人だったが、家を継ぐものがいなかったから、店を閉めることにしていたのだ」

老人「札幌はまだまだ変わっていく。この子が成人式を向かえる頃には、どんな風になっているんだろう」

俊之「おじいさん、見届けるんでしょう？」

老人「さあ、それまで生きていられるかどうか……」

俊之「お元気そうだから大丈夫ですよ」

老人「平均寿命よりかなりがんばらないとならないな。あつはつは」

俊之M「もしも、俺に子供と父親がいたら、こんな会話を交わすのだろうか？」

俊之「よおし、もう、大丈夫な時間だろう。ぼく、ポーって鳴らしてみるか？」

拓也「鳴らすー！」

俊之「ようし、抱っこしてやるから、そのヒモ引つ張ってごらん。せーの」

SE 警笛の音。

拓也「じいちゃん、ポーって鳴ったよ！」

俊之「はー、重いな、ぼく」

老人「いやあ、すいません、そんな大事なものに触らせてもらって」

俊之「せっかく乗ったんだもんな、これくらいしないとな、な」

拓也「うん！」

俊之「よし、また電車動くからな、しっかりとつかまってね」

俊之M「抱き上げた子供の重みは、このササラ電車で、市電の安全を守っている……そんな責任の重みのような気がした」

SE 警笛の音。

老人「札幌の市電は優しいんですよ。心があがる。私ら年寄りが乗り遅れそうになると、ちゃんと待っててくれる」

俊之「寒い中や暑い中、それに雨の中、雪の中、次の電車を待っててもらおうのは申し訳ないですから」

老人「それに窓から見える季節の移り変わりが実に良い。夏は窓を開けて、外の風を

取り込んで。冬はササラが走って」

俊之「そうそうササラ電車はカッコイイ。俺はこのササラ電車を運転したくて、交通局に入ったんです」

老人「孫は、ササラ電車を見ているときがイチバン良い目をしているんです。目が輝くってこういうことを言うんだなって」

俊之「普通の電車じゃなく、どうしてササラなんでしょうね」

老人「さあ、どうしてでしょうね。そう、そういえば、運転手さんの目も、今、すごく輝いてるよ。会ったばかりの時と、違う目だ、確かに輝いてるよ」

拓也「僕ね、大きくなったらしゆるしゆるさんの運転手になるんだ！」

俊之「ええっ！！！」

俊之M「俺は耳を疑った。俺も小さい頃、ササラ電車をしゆるしゆるさんと呼んでいたからだ」

俊之「はは、しゆるしゆるさんか」

老人「この子の父親がそう教えましてね、それ以来、ずっとしゆるしゆるさんです」

俊之「俺も父親からしゆるしゆるさんって教えられました。懐かしいなあ」

拓也「しゆるしゆるさんってカッコイイんだ」

俊之「どこがカッコイイの？」
拓也「だってさ、しゆるしゆるって回るしき、

雪、ぶわーってするしき、それにしゆるしゆるさんがいないと他の電車も走れないんだよ」

俊之「すごいなあ、ぼく、良く知ってるな」

拓也「うん、パパに教えてもらったんだ」

俊之「うん、おじさんも知ってた？」

老人「おじ……おじさん？」

俊之「おじさんもいっぱい知ってるよ。ぼく、ぼくもおじさんみたいに、しゆるしゆるさんの運転手になるかい？」

拓也「なる！」

老人「そうだな、きつとなれるさ」

俊之「そうだ、しゆるしゆるさんのおもちやがあるんだよ、あげようか、あ、明日、お家に送ってあげるね、ぼく、お名前は何？」

SE 電車の急停止音。

俊之M「名前を訊こうと振り返ると、そこには誰も居なかった」

俊之「あれ？ ぼ、ぼく！ おじいちゃん！ ……あ、これ、あの子の……？」

俊之M「そこには幼稚園のものらしい名札が落ちていた。その名前には見覚えがあった」

俊之「ふじ組、田中俊之……どうして俺の名札が……」

SE ドアを開く音。

上司「おー、俊之、ご苦労さん、雪、多かつたか？ 今日ほちよつとかかったな」

俊之「あ、はい……」

SE 液体を注ぐ音。

上司「おい、コーヒーなんて飲んで寝られるのか？ 帰って少し休んだらいいのに」

俊之「始発が動き出して、一時間くらい様子を見たら帰りますよ」

上司「お、おいおい、今までこっちが引き止めなきゃすぐ帰ろうとしたやつが……何かヘンなものでも拾って食ったか？」

俊之「そんなんじゃないですよ」

俊之M「除雪を終えた朝六時、始発電車が動き出した。冬の夜明けは遅い。朝日が昇ってきたのは、それから一時間も経ってからだだった」

上司「いやあ、今朝はしばれたなあ。お、雪が光ってるぞ」

俊之「ホントだ、キラキラしてますね」

上司「なあにガラにもなく見惚れてるんだ

よ」

SE ぱしつと頭を叩く音。

俊之「痛つてえ……」

俊之M「俺がササラ電車を走られた線路を電車が揺れることなく走っていく。電車が巻き上げた雪に朝日が当たって、キラキラと光っていた」

俊之「あの……」

上司「なんだ？」

俊之「このへんで、おじいちゃんと子供の幽霊が出るって話、きいたことあります？」

上司「何よ、その幽霊を見たってか？ ない

ねえ、そんな話」

俊之「そう……ですよ」

SE ドアが開く音。

SE 出勤してくる仲間の賑わい。

上司「おー、おはようさん、みんなよく、この吹雪の中来られたな」

SE 無線の音。

無線の声①「市電、ススキノ行き順調に運行中です」

無線の声②「市電、四丁目行き、順調に運行中です」

俊之「あ、じゃあ、俺、帰ります。今夜も待機なんで……」

上司「お、お疲れさん、今夜は荒れなきや良いけどな」

SE 車のエンジンをかける音。

俊之M「吹雪の中、俺が出会った少年は、ササラ電車に憧れて、きらめいていた頃のおれ自身の姿だったのかもしれない」

俊之「俺、もつと、ちゃんと、仕事しなきゃダメだよな」

SE 携帯の着信音。

(曲：ゆきやこんこ)

俊之「(元気に)もしもーし」

上司「俊之、おはようさん。今日もすまんけど……」

俊之「ササラですね？ 了解です。すぐ行きます」

Σ